



緑の聖人

12月30日

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

12月30日のおはなし「緑の聖人」

I met the Guy and Allah,
sabbath could need covered
Your tape, I met Orleans,
cuckoo and aid

緑の聖人として知られるその女性は、神の言葉をしゃべる。だから私たちと普通の会話を交わすことができない。私たちはその女性に食べ物を運び、時折衣服などを差し入れする。その女性は聖人とは思えないような開けっぴろげな笑顔を浮かべて丁寧にお礼の仕草をする。あるいはあんな風の開けっぴろげに心からの感謝を表せるところが聖人の聖人たる由縁なのかもしれない、とそのたびに私は心の中で思う。

その女性は「あのお方」に会ったことがあるらしい。それだけでなく異教の神にも。安息日さえもが恐れおののくほかないできごとだったそうだ。村の大人達はそんなことを言って、その女性を尊敬しながらもあまり近づこうとしない。怖がっているのだ。でも私はちっとも怖いとは思わない。緑の聖人が木を植えているところに行って、お弁当と一緒に食べることもある。

オルレアンで会った、と聖人が歌う。お前の細帯、カッコー、そして救い。何のことが正確な意味はわからない。でもその女性はほがらかに歌い、木を植える。村の長は言う。緑の聖人はある日、突然姿を現したのだ、と。病をもたらす雨が降り続く、長い長い時代が終わり、何年ぶりに青空の見えた日に、山からひとり下りてきたのだという。何十年間も、誰も見たことがないような生き生きとした緑を両手いっぱい抱えて。歌を歌いながら。

そして村に緑をもたらし、栄養と健康と安全をもたらしてくれたのだと。ここで村の長は声をひそめ、恐ろしげに告白する。最初はみな、頭のおかしい女だと思ったんだ、畏れ多いことにな。だから何週間もの間、誰もまともに相手にしなかった。でもそのうち村の回りにどんどん緑が広がり始めて、その奇跡を目にして遅まきながら悟ったんだ。この人は聖人だと。そんなわしらをこの人は怒りもせず機嫌良く待っていてくれた。

私は衣服をつくるのが好きだ。それも私にしかつくれない服を。ほんのちょっと布をつまんでみることで、全体の印象が驚くほど変わることがある。私たち子どもを育ててくれるおじさんはそれを見て、無駄遣いをするな！と怒ったりするけれど、私に服のつくり方を教えてくれたおばさんは「おまえには形を見る力があるんだね」と言って、それとなく応援してくれる。

端切れを使って襟元や袖口を工夫するのも好きだし、服の種類を考えるのも好きだ。おばさんが教えてくれた、頭からすっぽり着る服だけでなく、羽織って着るもの、足下から身につけるものなど、いろいろな服を思いついた。どうしてかわからないけれど、わたしにはそういう服が不意に頭に浮かんでくるんだ。「若い頭はいいねえ」おばさんは言う。「あたしにはとても思いつけないよ、そんなの」

でも本当は私だってそんなに頑張っているわけじゃない。洞窟に住む緑の聖人に着てもらう服のことを考えていると、自然にいろいろな考えが浮かんでくるんだ。私が新しい服を届けると、どんなに新しい服でも、緑の聖人は迷うことなく身につける。最初からその服が自分の服だったみたいに身につける。それを見ながら私はまた、この人は本当に聖人なんだなと感心する。

I met the Guy and Allah,
sabbath could need covered
Your tape, I met Orleans,
cuckoo and aid

不思議な発音で聖人は歌うんだ。意味をなすような、なさないような歌を。

* * *

村の少女の話を聞いて自分はその聖人に会うことにした。もしかしたらと思ったからだ。ひょっとするとそれは自分の探している女性かもしれない。あの戦争中、緑を守るため反戦運動に身を投じ、軍部からにらまれて投獄され、それ以来ふっつりと姿を消してしまったあの女性かもしれない。もし生きているのなら、年格好もちょうど同じくらいだろう。

村はずれから始まる若い林の中をくねくねと登る道を歩きながら、もう少しで空き地に出るあたりでその歌声を耳にした。「雨がやんだら」とその声は歌っていた。そう。「雨がやんだら」。自分は吹き出した。“I met the Guy and Allah”だって？ 違う違う。あのお方に出会ったわけじゃない。アッラーに出会ったわけでもない。「雨がやんだら」と歌っているのだ。こらえきれずに声を上げて笑い、ほほを涙が伝わった。気がつくとき笑い声は、ほとんど吠えるような音に変わっていた。

そこには娘がいた。戦争の間に離ればなれになったわたしの娘がいた。年を取って、別れた頃の自分ほどの年齢になった娘がいた。父親の顔を思い出せないのか、自分が形相が変わるほど年を取ってしまったからなのか、娘は不思議そうな表情を浮かべこっちを見ている。ただしあくまで機嫌が良さそうに。そして彼女は歌い続ける。あどけない声で。木の苗を植えながら。

雨がやんだら砂漠に向かおう、
両手いっぱい緑を抱えて。

(「雨がやんだら」 ordered by shirok-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

緑の聖人

<http://p.booklog.jp/book/41546>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/41546>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/41546>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.